

シチェドリンの創作活動初期に おけるスラヴ主義

相馬守胤

1

シチェドリン（М. Е. Салтыков-Щедрин, 1826-89）が本格的な文筆活動を開始したのは、リツェイ卒業後、ペトラシェフスキーの「金曜会」に出入し、ドイツの哲学的政治思想、フランスの空想的社会主義に深い関心を寄せ、1847年11月中編『矛盾』をМ. ネパーノフの筆名で「祖国雑記」に発表したころとみなされる。両親のすすめに従い、陸軍省の官吏として勤務していた時期のことであった。

翌1848年には、第二作『もつれた事件』を発表したため筆禍にあい、7年半にわたるヴァトカ（現在のキーロフ市）左遷時代¹に入った。N. シチェドリンという筆名で作品を発表し始めたのは、ヴァトカのとりにから解放され、ペテルブルグの内務省に勤務しながら、クルトゴルスクと称する地方都市（流刑先のヴァトカ）を舞台にした『県物語』（1856-57）を「ロシア報知」に発表した時からである。この時期は彼の作家としての経験がまだ浅く、ヴァトカでの体験を深化するためにも、新たな創作の源泉を他に求める必要を感じていたに違いない。たとえば T. Г. シェフチェンコ² などから『県物語』の作者はゴーゴリの後継者と目されながらも、³ 一方においては自由主義陣営^{リベラル}の盟友たり得る可能性があるという希望を抱かせたこともその証左の一端である。

社会が政治的に未成熟な時代に執筆活動に入り、文学的、社会的自己決定が若干不安定で過渡的だった彼としては、はば広い模索も当然のことだったと言えよう。まして幼年時代は宗教心の篤い地方の旧家で育ち、批判力の弱い幼少年期に宗教的雰囲気^{リベラル}が母乳のようにいやおうなく浸透した彼であった。8才の時に福音書から深い感銘を受けながらも、しかし職業的聖職者の虚偽には早くから気付いていたし、当時田舎では一般に何の疑問も持たれていなかった農奴制や、現実^{リベラル}に眼前で展開されていた悲惨な農奴の生活は、幼いシチェドリンの胸に根強い不審の念を植えつけた。

やがて家庭教師の手を離れ、高等教育を受ける段階に入ると、他の多くの青年たちと同様、西欧的知性の洗礼を受け、ロシアの伝統的な宗教的迷蒙に対する批判力が強まって行く。自伝的要素が多く、彼自身の体験と一致点の少ない最晩年の作品『僻地の旧習』（1888-89）などがその経緯を物語っている。⁴

63才の生涯を通じてベリンスキー、チェルヌィシェフスキーの伝統に沿った、いわゆる西欧派的、革命的民主主義者として、科学的社会主義の段階まで肉迫した、先見性のある作家とみなされていることには何ら異論がない。しかしスラヴ主義は勿論、ナロードニキとも一線を画しながら、ナロードの習俗、心情、言語、さらにはその宗教心にまで深く通曉していたのである。かくも通曉するに至ったのは、ただ単に西欧派の伝統によりかかって、その路線のみを一路歩んだからではない。西欧派の多くの作家、思想家が、彼らとの境界が未ださほど分明では

なかった 40 年代の大分裂以前の古典的スラヴ派の関心の対象に深い関心を寄せ、究極の目標こそ異なれ、ナロードの全貌把握のために多くの共通した研究テーマを追求していたのである。シチェドリンもその例外ではなく、宗教とスラヴ主義に対する関心が格別強く動いた時期があり、しかも短期間ながらこれに強く惹かれたため、論者によっては彼をスラヴ派の一員とみなすほどであった。

本稿においては、彼のスラヴ派的要素の根源を、イワン、コンスタンチン・アクサーコフ兄弟に代表される、いわゆるスラヴ主義の論客たちとの交友関係から得たものとはみなさず、彼らの父である C. T. アクサーコフ（1791-1859）に対する終生変らなかった感謝と尊敬の念に裏うちされた、主としてシチェドリンの創作活動初期における、ナロードの生活の根底に迫ろうとした思想的発展過程のひとつにささやかな焦点を定めてみたい。

2

スラヴ主義の代表的論客であるアクサーコフ兄弟や、彼らの父セルゲイ・チモフェーエヴィチとの交際は、1856 年 1 月 流刑先ヴァトカから ペテルブルグの内務省に帰任後に始ったと思われる。

流刑に処せられる前の 40 年代、ペテルブルグにおける反政府的、社会主義的青年サークルに特徴的だった抽象的な啓蒙主義、コスモポリタンの傾向は、シチェドリンにも共通していた。しかしヴァトカ流刑中における種々の新たな体験と思想的発展により、ペテルブルグ帰任後はロシアの勤労大衆、農民階級と具体的に結びついた民主主義の傾向が特に強まっている。このことについてはシチェドリン自身の作品『クリスマス物語』で次のように語っていることからもうなずける。

「私は自分の胸の内に目に見えない熱い流れがひそんでいて、それが不知不識の中に、ナロードの生活の最初にして永遠にほとばしる源泉へと私をひき入れて行くのを、疑いもなく感じた」⁵

作家としての経験がまだ浅く、題材の範囲も狭かった当時の彼が、8 年近くも草深いヴァトカに左遷されたことは、僻遠の地方都市の現状、周辺の農村、そこに住む大衆、農民のあるがままの現実の生活面の表裏、精神生活、希望、信仰、言語、習俗を自分の眼で直接見て肌を感じ、民衆的基礎に立って「ロシア生活を採掘」するのにまたとない絶好の機会でもあった。この体験にもとづいてリアルな芸術的描出方法を探求し、その路線上で遭遇するスラヴ主義的見方に多くの関心を抱き、スラヴ主義者たちとの出会いもここに始まったのである。しかしここで注意しなければならないことは、スラヴ主義に並々ならぬ関心を持ち、スラヴ主義者たちとの交際がしばし続いたことを、彼がたとえ一時的にせよスラヴ主義者に変貌したとってはならないということである。スラヴ主義の「教義」の理論的、教理的な面に同調したとは解釈されない。彼らと一致したのはナロードの歴史と精神的生活、民族的独自性の理念を立証する具体的な探求の方向であって、そのために口伝文学や古代文学作品を収集し、農民の宗教的イデオロギーを研究し、農奴制が農民に及ぼした心理的影響、世態風俗を研究したのである。

しかし一方、たとえば革命前の B. П. クラニフフェリドの論文⁶ その他においては、ペテルブルグ帰任後最初に発表した『県物語』の中でシチェドリンがロシア農民の温順性を理想化しているとみなしており、その他の労作⁷ でもこれと同種の見解をとっているものがある。その根拠となったものは、上記作品の中的一篇『祈禱者、遍歴者、通行人』でナロードの温順性、

非覚醒を描写している点であるが、これをもって理想化とみなすことは早計であろう。ただし前述のようなナロードの全貌把握の過程において、たとえばピョートル大帝を「当時の最高に頑冥固陋な男」⁸と評した言葉などにスラヴ主義的色彩が認められることは事実である。それは亡命中のゲルツェンが旧友アクサーコフの死に際して述べた次のような回想の一文に見られると同様である。

「しかり、われわれは彼ら〔スラヴ派〕の敵対者であった。だがそれは極めて奇妙な敵対者であった。われわれには同一の愛があったが、しかしその愛は等しからざる愛であった。……われわれはヤヌス⁹のように、双頭の鷲のように、異なる方向を眺めていたが、しかも心臓は一つに鼓動していた」¹⁰

ここでつけ加えておきたいことは、シチェドリンのこのような発言は「本質的でない」「偶然的なもの」でもなかったし、さりとてスラヴ主義的作家としての発展段階における一特徴と見ることも妥当ではないということである。彼の「スラヴ主義的発言」とその真意については、このあとに紹介するスラヴ主義者たちとの交友関係、回想録、書簡等も参照しながら順次確認して行くことにする。

3

ヴァトカ時代に蓄積したナロードに関する知識と思想を、ペテルブルグ帰任後数人のスラヴ主義者と接触することによって、さらに深化しようとしたことは周知の事実であり、多くの資料がこれを証明している。

1857年8月23日、スラヴ主義的色彩の濃い学友の社会評論家 H. B. パーヴロフへの返信文末で、シチェドリンは次のように語っている。

「正直のところ、僕はスラヴ主義者たちの方へ激しく傾いているし、現在のところ他の方向にむかうことは難しいと思っています。ここだけに何か確固たる土壌に似たものがあり、ここだけに健全な発展の印があるのです。つまり、ピョートルの改革は、君も知ってるように、どんな結果をもたらしたでしょうか。なんともはや、ロシアになんたる不快事が起ったことだろう。ロシアは自分の生命を一度も活かしてないのです。タタールのであってみたい、ドイツ的であったりして。ころあいを見はからって、何らかの自立の徴候を見出すために、よじのぼらなければなりません。これはなんとも遠い道のりです。しかもロシア人に茸のように付着した外国の汚泥の層を掻き落せはしないでしょう」¹¹

また、そのはるか後年の1884年秋、A. C. スヴォーリン¹²はイワン・アクサーコフに宛てて次のような手紙を送っている。

「当地〈ペテルブルグ〉に着きましたが……たった一つ面白いことがあります。それはサルティコフ〈シチェドリン〉の二通の手紙で、ある知人が私に見せてくれたものです。これらの手紙は1857年のもので、すばらしいことに、サルティコフはスラヴ主義者と自認し、ピョートル大帝のことを『ルーシにおける最高に頑冥固陋な男……』と呼んでいるのです」¹³

これに対してイワン・アクサーコフは次のように答えている。

「あなたがサルティコフについてお知らせ下さったことに私は驚きません。彼は当時私や私の兄と交友関係にあったし、亡父を訪問していたし、われわれの方向に近かったのです」¹⁴

このように『県物語』発表当時のシチェドリンがスラヴ主義者たちに対して共感するところが少なかったことは、以上の資料にとどまらない。とは言っても「正統派」には一度も属し

たことがないのもまた事実である。しかし H. B. パーヴロフや C. A. ユーリエフ等のとりなしで、初期スラヴ派の活動家たち、たとえば A. C. ホミャコフ、イワン、コンスタンチン・アクサーコフ兄弟、A. H. コシエリョフ、B. A. チェルカッスキー公爵等と広く知遇を得ていた。もちろん、当時のスラヴ主義者たちの全ロシアの中心的存在であったセルゲイ・チモフェーエヴィチをモスクワの住居に訪ねたことも判明している。

C. T. アクサーコフの娘ヴェーラは 1858 年 4 月 5 日、従姉妹の M. Γ. カルタシェフスカヤ宛の手紙でこう伝えている。

「……今日シチェドリンが見えられます〈……〉お父様の作品にとっても熱烈な敬意を払っている方です。彼はリャザンの副知事になって行きますが、あの人が現われたら全県がきっとびっくりするに違いありません」¹⁵

農奴解放に関する地方行政的仕事に関与したいという意図もあって、シチェドリンが中部ロシアの地主県リャザンの副知事任命を受諾したのは 1858 年 3 月 6 日（32 才）のことである。ヴァトカに次ぐ 2 度目の地方勤務に備えて、農民運動が盛んだったリャザンでの行政活動と執筆面の充実した時期を迎えようとしていた時でもあり、C. T. アクサーコフとの対面にはかなりの意気込みと期待があったのではあるまいか。

ヴェーラ・アクサーコヴァは前掲の手紙から 2 日後、つまりシチェドリンのモスクワ滞在 2 日目の 4 月 7 日、次の手紙を書いている。

「初めてサルティコフが来ましたが、この人はあまりに変わり者で、兄たちは彼を人見知りする人だと言っています。彼は口が重い上に長居で、その時私たちの家にはお客さんたちもいたのですが〈……〉そのお客さんたちが帰られてから、私たちは書斎へ行きましたが、お父様はサルティコフの来訪ですっかり疲れておられました。イワンもそこにいましたのに、彼をもっと早く連れ出すことが出来なかったのです」¹⁶

「変わり者」シチェドリンが対話者 C. T. アクサーコフを疲れさせるほどにどんな長話をしたか、内容については残念ながら想像の域を出ない。その数箇月後、イワン・アクサーコフによって、当時アクサーコフ一家の関心のまどだったロシア文学愛好者協会が復興し、シチェドリンもその新たな成員に加わっていることから、話題の大部分は上記協会の復興計画であつたろうと推量されている。¹⁷

また、シチェドリンがリャザンに赴任したらリャザン全県が驚くだろうと言ったヴェーラの予想は見事に事実となった。副知事として合法的かつ公正に職務を遂行したが、汚職官吏や無能官吏を遠慮なく排斥し、より若くて有能な世代を起用したり、地主の犯罪について数度にわたり訴訟を起したり、農奴に対する不当な仕打ちに抗議したりした。地主勢力の強い県に乗り込んでこの行動は、やがて農奴所有貴族たちの憎悪を買い、「ヴィツェ・グベルナートル副知事」をもじった「ヴィツェ副ロベスピエール」という名誉ある異名をもらって、トヴェリへ転勤している。

ロシア・アカデミー総裁 A. C. シシコフと知遇を得てスラヴ主義者たちに近づいた C. T. アクサーコフは、なるほどスラヴ派の中心的存在ではあったが、後にシシコフ及びその派にも幻滅を感じたし、プーシキンよりもゴーゴリを好んだアクサーコフだったが、諷刺的手法には全く無縁だった。その彼にシチェドリンは深い関心と尊敬の念を抱いており、スラヴ主義者と誤認される要素を持っていたことは事実であるが、Я. エリズベルグの次のような言をまつまでもなく、C. T. アクサーコフへの傾倒は持続的に深かったのである。

「C. T. アクサーコフの非凡な知性、健全な分別、ロシア生活に関する豊富な知識、壮麗で、明快で、手堅くて、平明なロシア語が、モスクワ的な地主貴族的限界を持っているにもかかわらず

らず、シチェドリンを惹きつけた」¹⁸

4

1857年8月シチェドリンは『県物語』の中の短篇『祈禱者、遍歴者、通行人』を「ロシア報知」に発表した。この作品には「C. T. アクサーコフに捧げる」という献辞がある。シチェドリンにとっての C. T. アクサーコフは、コンスタンチンやイワンのスラヴ主義よりもはるかに源流を志向した「ロシア民衆の内的生活を解説」する価値の面で貴重だったし、彼の創造的経験から多くの学び取るものがあつたのである。このことについて C. T. アクサーコフに宛てた 1857年8月31日付の手紙がある。

「拝啓 セルゲイ・チモフエーエヴィチ様

8月26日付の尊簡を衷心より嬉しく拝受致しました。あなたの御激励のお言葉は多くの理由で私にとって貴重でありまして、そのお言葉の中には、私として力相応の仕事をするべき新たな責任を感じる次第です。¹⁹ 私は特別な愛情をこめて『祈禱者』の執筆にあたりましたし、つつみかくさず告白いたしますが、あなたの素晴らしい作品は拙著²⁰の構想にも、執筆そのものにも著しい影響をおよぼしました。この章の短篇全体を通じて一貫した考えは、まだ十分明瞭に感じとられておりません。これを完全に明らかにするためには、さらに数篇の短篇が必要です。この考えというのは、わが国社会の各種階層における宗教心発現の程度と様式のことです。²¹ 私はこれまでに、平凡な民衆の見解と金持ちになった商人の見解の一部を口頭（兵士の話）と文章（パホモヴナ）で述べる事が出来ました。²² このあともまだ沢山やる必要がありますので、もしも私の意図を激励して下さることがお差支えなくば、このあとに続く短篇もあなたに捧げる光栄に浴したいと存じます。ただしこの際、これが最後ですが、仕上げが若干ぞんざいだったことをお許し下さい。このようにぞんざいになったのは、仕事を急いでやったことで説明がつけますが、急いでやった釈明としましては、生活上の各種事情によるのでありまして、これについてはこの書面では御説明すべき場ではないと存じます。

敬具」²³

以上の手紙に見るように、C. T. アクサーコフの『家族の記録』がシチェドリンに及ぼした影響の浅からぬことを告白している。そしてこのあとに続く短篇シリーズにもアクサーコフへの献辞をつける予定であつたが、続くはずの短篇シリーズは実現せず、また同じ1857年に「ロシア報知」に発表した作品を『県物語』の単行本として発刊された版にはこの献辞が除去されており、その後ももはや復活しなかったことは注目すべき事実であろう。

前掲の手紙から3箇月後の1857年11月28日、シチェドリンは C. T. アクサーコフに第2信（にして恐らく最後の手紙）を送っているが、第1信と同様、これもアクサーコフへの返信であり、アクサーコフからの手紙はいずれも不明である。内容は「ロシア報知」などへの寄稿予定のほか、職務上の都合が許したらモスクワへ行ってアクサーコフを訪れ、じきじき敬意を表したい旨を伝えている。²⁴

翌1858年の3月5日イワン・アクサーコフは父 C. T. にこう伝えた。

「私は日曜日にサルトィコフの所で食事をしました。親愛なるお父様、彼はあなたの健康のために乾杯しようと提案しました。乾杯はその1回だけだったのです」²⁵

前々から考えていたとおり、その1箇月後にモスクワの C. T. アクサーコフを訪問したこと

は、前章の娘ヴェーラの手紙を引用してふれた。当時シチェドリンはコンスタンチン、イワンの兄弟、特に弟のイワンとはかなり親密な関係にあった。それは B. П. ブレーニン²⁶ の次のような回想録に見るとおりである。

「私の記憶の中には、60年代の始めにイワン・セルゲーエヴィチ〈アクサーコフ〉の所へしばしば来訪した面白い文学的《金曜会》員たちがまざまざと残っている。愛想のいい主人の客好きな家では、なんと多様な文学的要素がぶっかり合ったことだろう。そこには Ал. И. Коси́рьев²⁷ のようなスラヴ派の中心人物たち、故人になったダーリ²⁸ のような老令の文学者たち、M. E. サルトコフのような純然たる《西欧派的》な、光彩を放つ偉大な才能たち、ユルケヴィチのような哲学教授たち、ベゾブラゾフ²⁹ のような経済学者たち、自由主義的聖職者たち、若いブルガリア人やセルビア人たち、かけ出しの文学者たち……が集った」³⁰

このように、当時シチェドリンはアクサーコフ一家と親密な関係にあって、上記の文中にはコシエリョフの名も見えている。彼は目前に迫りつつあった農奴制廃止という、スラヴ派側から見ても主要な問題について論陣を張っていた。シチェドリンはリャザンの副知事時代、この同じリャザン県の地主であり、かつ一部貴族階級のブルジョア的意向と直接結びついていた専売一手引受人コシエリョフの立場を積極的に支持した。またイワン、コンスタンチン兄弟も、初期スラヴ派が全般にそうであったように、スラヴ主義的ユートピアを奉じながら、ゲルツェンの『鐘』紙上で反政府的批判を行ない、当局の迫害を受けている。

当時シチェドリンが密接に関係を保っていたイワン・アクサーコフをはじめ、スラヴ主義のすぐれた代表者たちが市民的自由をめざし、民衆の福祉を保障する問題で、民主陣営とも提携しながら事業を展開し得ると、チェルヌィシエフスキーさえ期待していたほどだった。従ってシチェドリンはアクサーコフ兄弟と親交を保ち、彼らの出版事業に協力を表明しているが、³¹ このことをもって彼がスラヴ主義的党派に所属していたと即断すべきではなかろう。なぜならば、スラヴ主義的正統派からほど遠く、息子たちがあれほど懸命に信奉した独断的教義³² には概して関心を示さなかった C. T. アクサーコフの『家族の記録』に傾倒していたことは、とりまなおさずシチェドリンの中立性を立証するものであったからである。³³ しかもその上イワン・アクサーコフとの思想的共通性もやがて失なわれ、彼について『忘れられたバラライカ』という物語を書こうと思ったこともある。³⁴ また 1862 年にはオーチェルク『読者へ』、³⁵ 1863 年には『コハノフスカヤの中編について』³⁶ を発表して、スラヴ主義を批判の対象としている。その後『僻地の旧習』、『人生の瑣事』などの後期作品においても、スラヴ主義的な過去の美化、理想化をはげしく攻撃しているのである。

5

第2章末尾でふれたシチェドリンの「スラヴ主義的発言」については慎重に検討する必要がある。彼は少くとも専制政治を擁護する側にまわったり、官許正教に味方したり、農民の従順さを美化したりはしなかった。またシチェドリンが創作活動初期にかなり接近した初期スラヴ主義は、ヨーロッパの輝かしい文明の成果に対する憧憬と憎悪が混淆した、内的矛盾を内包した複雑な思想であって、シチェドリンとは一貫して相容れぬ自由主義的保守の中層貴族地主階級の理論体系の一つであったことは確言できよう。³⁷

シチェドリンは人間をとり巻く社会環境、大衆の精神生活を形成している社会的基盤に強い関心と注意を払い、スラヴ主義的見解は彼の著作に濃厚な印影を残したが、これらの問題は当

初スラヴ主義者が提起した問題でもあり、そのことによって「スラヴ主義者シチェドリ」という異説が成立するわけではない。彼が作品の中に描出した詩情は、農民の習俗や心理の否定的な面を理想化したのでもないし、ナロードの温順性を理想化したのでもないことは『同時代人』誌に掲載されたドブロリューボフとチェルヌィシェフスキーの次のような正当な評価によっても確認することが出来る。

ドブロリューボフは1857年、『祈禱者、遍歴者、通行人』についてこう評している。

「ここには感傷癖もないし、いつわりの理想化もない。ナロードはあるがまさに、その欠点、粗野、未発達を備えている」³⁸

チェルヌィシェフスキーは農奴解放令発布の1861年、つまり国内における革命的状况が頂点にあった時に、同じ作品について次のように述べている。

「シチェドリが民衆の生活について書いた短篇のあるページには、ダーリ氏の全著作よりも多くのことが民衆についてまとめられており、かつ語られている」³⁹

シチェドリはナロードの精神生活のプラス面とマイナス面の双方を客観的に洞察しようと試みたが、この点がスラヴ主義者たちと手段、方法において一致したのである。これが最も端的に表われているのは、ナロードの宗教的世界観に対するシチェドリの関心の深さと分析の鋭さであろう。しかし前章で引用したC.T. アクサーコフ宛の手紙で「各種階層における宗教心」に照明を当てようとした意図は、スラヴ主義者たちの暗示によると考えられる。たとえばロシア・フォークロアの有名な収集家П. В. Киреевский⁴⁰の労作に関心を寄せ、著作に利用している。⁴¹ 現世の救いを宗教に求めた民衆の切実な希求の中に、彼らの世界観の本質を追求し、これにともなう各種形態の発現に大きな関心が生じたのである。この際、宗教的には既に形骸化し、国家権力と癒着し、広大な寺院領を所有し、ナロードの蒙昧を悪用して、民間俗信の温床ともなっていた官許正教は、むしろ対象外にあった。ロシア本来の宗教のにない手であった巡礼や聖地詣でのような、ナロードの生活に根づいた諸現象、官許正教の専横に反抗して起った分離派、非改革派の一部に普及していた神秘的な宗教詩などの歌謡に、形骸化し俗化する以前のロシア庶民の内的世界の真の姿を認めたのである。シチェドリ自身も、初期の作品『県物語』発表後30年もたってからでも、「非改革派の人々は民衆の花である。彼らは勤勉で、進取的で、真率で」云々と、アバクム派的な、異教徒視されて来た宗教の流れを高く評価している。このように真率で激しい荒行や祈り、冥想にひたり、森林の中に草庵を結んで修道に励んだひたむきな求道の伝統にこそ、ロシア本来の素朴で敬虔な信仰と、官許正教と癒着した専制への反抗を見出し、農民世界のエリートを見たのである。

ヴァトカ流刑中にシチェドリは度々の辺地出張などをともなった勤務活動によって、これら「異端的」分離派、非改革派に関する体験的知識を蓄え、П. В. Киреевскийが発表した宗教詩のみならず、手書きによる、いわゆる「教訓説話集(цветники)」や、分離派、非改革派が慣用した読物や朗読などにも通じていた。またスラヴ主義者と共通の対象について、スラヴ派的小路にそれ込んだことはあっても、彼らの教義の追従者としてではなく、「自分の発展の道」に沿って関心と知識を深めたのである。このことはA.H. Пипин⁴²が有名なスラヴ主義者B.H. Рамонскийに宛てた、1859年3月15日付の次のような手紙によって知ることが出来る。

「……わが国の文学においてスラヴ主義者たちの意見はより大きな領域を占めつつあるとあなたは思っておられます。あなたは学者たちの名前を引用し、サルトィコフ、ツルゲーネフ、コハノフスカヤ⁴³等の名前を挙げられます。私はまだ『貴族の巢』を読んでおらず、それにつ

いてあなたとお話が出来ないことを残念に思いますが、しかし、サルティコフとツルゲーネフがまさにスラヴ主義思想の影響によって変化したとは総じて思いません。彼らは全くスラヴ主義者なんかではなくて、ただ自分の普通の発展の道を歩んでいるだけで、全く異なる種類の意見の領域に飛び移ったのではないと、率直に思います」⁴⁴

ラマンスキーの誤認も無理からぬふしがあるが、それにしてもプーシンの指摘の妥当性には敬服せざるを得ない。シチェドリンはスラヴ主義者のように、ナロードの世界観に見られる神秘的宗教的要素を理想化したわけではないし、消極的な忍従を理想化したわけでもなく、⁴⁵ ナロードの宗教観、殊に分離派などに見られる、すぐれてロシア的な習俗と心理の中に、「蒙昧な信念」の覆面の下に秘められたナロードの健全な道徳的威力を見出したのである。

6

1855-56年に『聖山で剃髪したアトスの修道僧パルフェーニーの、ロシア、モルダヴィア、トルコの聖地遍歴の物語』(以下『パルフェーニーの遍歴物語』という)がモスクワで出版され、当時の文学界において広く注目を集めた。H. Γ. チェルヌィシエフスキー、⁴⁶ C. M. ソロヴィヨフ、⁴⁷ H. Γ. ギリャロフ・プラトノフ⁴⁸ が批評を発表し、後に Л. Н. トルストイの注意を惹き、Ф. М. ドストエフスキーも強い印象を受けて、大作『カラマゾフの兄弟』の創作面にも影響を与えたものである。⁴⁹ これは一応「分離派」に対する「暴露的」作品に属する。とは言っても、多くの「分離派」非難論文とは内容的に異なり、農民の宗教心解明、分離派宗徒の迷蒙解明に向けたものである。狭小な教義上の問題よりも、正教徒農民、特にロシア国内国外に居住する非改革派について論じており、当時の進歩陣営の関心の対象であったナロードの精神的欲求、思想的探求、人心の動揺を広範に記述している。著者は П. В. ワシーリエフ・チェルトコフ(1782-1853)という、外国に住むロシア非改革派の中で枢要な地位を占める人である。彼は「分離派」から出て数年後、ギリシャのアトス⁵⁰ の或る正教修道院で剃髪して修道士になった。その後ロシアに定住するようになり、1821年からウラジーミルの、さらにその後はヴォロネジの大主教をつとめた。宗教作家として文筆活動をし、以前奉じていた教理に対して積極的な斗争を行っている。彼のこの論文についてはシチェドリンも関係していたので、その一連の経緯に概略ふれてみたい。

『読書文庫』の編集者 A. B. ドルジーニンは1858年9月19日、И. С. ツルゲーネフにこの論文に注目するようすすめた。

「あるいは私がひどく間違っているか、あるいはたとえ種類も方向も言語も全く似ていないにせよ、ゴゴリ時代以来われわれはロシアにおいてかくも高度の才能を見たことがなかったのです。こういう本は仕事の合間に読むことは出来ません。もしもあなたがまだ田舎にお住まいでしたら、一週間腰をすえて、極めて独創的な芸術家が極めて独創的な言語をもって伝えた、この偉大な詩的幻想に浸って下さい」⁵¹

ドルジーニンに宛てたツルゲーネフの返信は次のように述べている。

「私はパルフェーニーを読みました〈…〉。そしてこれに関するあなたの御意見は全く正しいことがわかります。これは、これについて立派な論文を書けるし、また書かなければならない偉大な本です〈…〉。パルフェーニーはロシアの偉大な芸術家であり、ロシアの魂です」⁵²

しかしドルジーニンはツルゲーネフから原稿をもらえなかったので、1856年春には Ан. グリゴリエフ⁵³ に要請した。彼は半年後の1856年9月19日、執筆の進捗に困難を来とし、書き

上げはしたものの不満である旨を伝えている。⁵⁴ だが編集部から再度執筆を要請され、An. グリゴリエフは1857年1月5日ついに他の筆者にその役割を譲ることに同意した。⁵⁵ その筆者とはほかならぬシチェドリンであったという推定は確度が高いと思われる。

シチェドリンは当時ドルジーニンと交友関係にあり、編集に協力を同意していた。執筆を自ら申し入れたのか、ドルジーニンから要請されたかについてはさだかでない。いずれにせよ1857年の前半か7月以前に書き、生前は発表されなかったが、1937年B. B. ギッピウスによって初めて印刷に付された。これとほぼ同時期に書かれた『祈禱者、遍歴者、通行人』とは、理論的、社会評論的な一種独特な対比をなしている。

ナロードの精神生活の中に牢固として存在し続ける健全な宗教心にこそ、シチェドリンにとって敵対的否定的な官許正教に強く対立する没我的パストを、通りがかりの観光客の冷淡で皮相的な目ではなく、この『パルフェーニーの遍歴物語』から感じとったのである。シチェドリンはこの作品を宗教的、神学的見地から見たのではなく、民俗学的見地から見ると強調しながらも、⁵⁶ ロシア人の信仰に関する最も誠実な考え方をここに見出しており、いかに彼の信念から遠くへだたっておろうとも、その根底に真摯さがあるだけでも魅惑的に作用すると述べている。⁵⁷ また、誠意と情熱から生ずる「同胞に対する愛のこもった自己犠牲」⁵⁸ に共感をおぼえ、彼の関心の鍵ともいえる次のような発言に注目したい。

「この原因はよくわかる。すなわち、熱烈で活気ある確信に出会うことは、われわれにとって喜ばしいし、選択した理念への奉仕に自分自身を完全に捧げ、この理念を没我的行為と人生全体の目的にした人を詳述することはよろこばしいことである。そのため、われわれの考えをこの人の考えから引き離している空間をも、われわれは喜んで忘れるし、われわれをとりまき、彼の考え方を不可能なものとした状況の総体をも忘れる。そして彼の精神的喜びと苦痛についての物語を、文句なしに愛情をもって見守るのである」⁵⁹

啓蒙的道徳的パストに根ざすあらゆる確信を社会的に貴重なものとみなすシチェドリンのこの傾向は、宗教的な感情にも通じるひたむきなものを感じさせる。ただし最初の手稿と訂正後の手稿の間には、評価のしかたに動揺が認められる。

当初は修道僧パルフェーニーの物語の中に、大衆の宗教心におけるイデオロギー的、心理的健全さを見出そうとしたが、手稿を訂正して、「禁欲主義」とその擁護者に対する激しい論争に転じたのである。

彼はC. T. アクサーコフの『家族の記録』と『パルフェーニーの遍歴物語』とは、対象も表現も異なるが、民衆の習俗を誠実に描き、その対象に愛情を抱き、しかもそれをよく知りつくして、描写が明確で完全な点で同列に並べていた。しかしAn. グリゴリエフの有名な労作『本質的批評のパラドックス』(1864年)に見るように、後者すなわち『パルフェーニーの遍歴物語』には否定的態度をとる傾向にあった。An. グリゴリエフはペテルブルグの回想(おそらく1857年)を残している。

「……ある文学の夕でのこと〈…〉私はある人とパルフェーニー神父の本について話をする事になったが、この人はその活動から判断して、ナロードの習俗についてより通曉した判定者とみなすことが出来たし、彼は当時県の流言⁶⁰を語っていただけではなく、ナロードに対してときどき強い共感を表明していたし、ある程度仕事に関する知識をもって分離派宗徒のことさえ描いていて、しかも彼らの習俗に通じていた人⁶¹とは違って、誠実に描いている〈…〉」⁶²

これはシチェドリンを念頭においていることは明らかである。シチェドリンはここで世界観の形成過程を歩みつつあったが、チェルヌイシェフスキー的表現で言えば、「お役所式の民族

性理論」,つまりスラヴ主義的見方を、「劇場の群衆を眺めるようにナロードを見ていた、眠たげな、半ば牧歌的な見方」⁶³と評している。

7

最後に農村共同体に対するシチェドリンの見方とスラヴ主義者のそれとの大きな差異に若干ふれてみたい。

『田舎に関する手紙』(1869年)シリーズの第8信で、シチェドリンはチェルヌイシェフスキーの論文『共同体的所有に対する哲学的偏見の批判』⁶⁴(1858年)を考慮に入れながら、次のように書いている。

「国家的習俗の発展には3つの段階が認められると、かつて全く正しく言われたことがある。⁶⁵ 第1段階では共同の土地利用がより便利であって、第2段階ではそのような利用は不便と認められ、そして第3段階ではそれが再び必須となる。しかし、わが国の農民たちがまさに第2段階の特徴である過渡的状态にあるところに問題がある。かれらは無意識的な共同体の時期から脱しているが、意識的な共同体の時期には入っていない。目下共同体は農民階級を結びつけていないばかりか、たとえどんな進歩にせよ、進歩の障害となっているのみならず、ありとあらゆる作用のための最も好都合な活動舞台の様相を呈しているにすぎない。共同体が護っているものは(これを護ることに本質的な目的があるのだが)非常にわずかで、共同体がかつて自分の懇請を固執するのが前例がないほど少く、その反対に、結びつけることは非常に多い」⁶⁶

共同体理論についてはスラヴ主義者とロシア社会主義者とは、根本的立場において全く異なるもので、シチェドリンはスラヴ主義的理解に反対し、ゲルツェンやチェルヌイシェフスキーの共同体論を擁護する立場に立っていた。しかしチェルヌイシェフスキーは、共同体に関する問題提起そのものについてはスラヴ主義者たちの方が先んじていたことや、彼らの「発見」から出た若干の結論を評価した上で、次のように述べている(1857年)。

「スラヴ主義者たちのあらゆる理論的誤解、あらゆる幻想的熱中は、わが国村落の共同体組織が経済面においていかに変化しようとも〔訳註：すなわち農奴制廃止後〕不可侵のまま残るにちがいないという確信だけでもって、すでに償なわれてあまりある」⁶⁷

スラヴ主義者たちは、コンスタンチン・アクサーコフをはじめとして、共同体というものを農村生活の基盤、庶民生活の精神的物質的面を保障する形態とみなしていた。シチェドリンはこの反対に、「共同体、村団のために個人を隷属化すること」には絶対反対であって、共同体というものを少なくとも当時の歴史的段階における農村生活の否定的形態とみて、排斥さるべき形態とみなしていた。晩年の作品の中で、50年代後半にスラヴ主義者と関係のある一人の男との会話を回想しながら、次のように述べている。

「しかし、私自身には、共同体が何か新しいことを言うだろうと思え始めた。《農奴制を廃止せよ！ そうすればただちに共同体が舞台面に出るであろう！》——当時はだれしもがそう言っていたし、当時運動の先頭に立って、連帯保証の便利さをすでに予見していた西欧主義者たちまでがそう言っていた」⁶⁸

しかしシチェドリンは「無意識の共同体」、無自覚の共同体が将来意識的社会主義的に発展するかもしれないという希望を持った時があったにしても短期間に過ぎなかった。そしてスラヴ主義者や、共同体に神話的価値を付与する理論に対して論争し、共同体の役割には、ピョー

トル大帝時代の目付役的政策を実施するのに便利な「連帯保証」の役割をになっていることを指摘し、活動分野と習俗の面で共同体構成員を「従順の無我的行為」に陥れ、彼らの個性の発達を拘束することを攻撃した。スラヴ主義者が「全ロシア的温順と謙仰」に、ロシアの偉大な未来を期待したのに対して、シチェドリンはこのような大衆の従順な消極性の中に、未来に対する大きな危惧を感じ、大衆の意識的活動的態度をよびさますため、敵対勢力の威力を諷刺的に誇張し、悲劇的な、時には絶望に近いテーマを追求し続けた。

ナロードの精神生活を研究する手段方法探求の途上で、スラヴ主義者たちとも交際し、彼らの根本思想に触発されるところが少なくなく、多くのものを吸収したとしても、彼らの教義のドグマ的要素にはあくまで無縁であって、大衆を意識的活動へと鼓舞する情熱は、生涯を通じて弱まることを知らなかったのである。

(1978年9月30日)

なお、本稿は昭和51年度学校法人札幌大学研究助成費による共同研究テーマ「19世紀中葉ロシアの思想と文学」の一環として執筆したものである。

註

1. 1848年4月から1855年12月まで。
2. Тарас Григорьевич Шевченко, 1814-1861, ウクライナの詩人、画家。
3. Тарас Шевченко. Собр. соч. в 5-ти томах, М., 1949, т. 5, стр. 157.
4. Собрание сочинений М. Е. Салтыкова-Щедрина в 20-ти томах, Худож. лит. М., 1965-1979 (以下 Щ. と略称する), т. 17, стр. 35, 337.
5. Щ. т. 3, стр. 146, 「クリスマスの物語」(1858) 第1章末尾。1858年1月雑誌「アテネ」№5に発表。
6. В. П. Кранихфельд, М. Е. Салтыков (Н. Щедрин). в кн. «История русской литературы XIX века». М., 1910, т. 4, стр. 243-244.
7. シチェドリノ作『県物語』について、——ヴェ・キルポーチンの論文紹介——, 萩原秀夫, ソヴェト研究者協会文学部会編「ロシア文学研究」第1輯, 昭和22年11月10日再版発行, p. 141, 下。
8. 次章でふれる。
9. ギリシャ神話の両面神。
10. 勝田吉太郎著「近代ロシア政治思想史」, 創文社, 昭和36年9月15日発行, p. 81; マーク・スローニム著, 池田健太郎訳「ロシア文学史」, 新潮社, 昭和51年5月30日発行, p. 157, 下。
11. Щ. т. 18 (1), стр. 179.
12. 1834-1912, 有名なジャーナリスト。当初穏健な自由主義的諸新聞や、「ヨーロッパ報知」に協力していたが、後、反動的な新聞「ノーヴォエ・ヴレーミヤ」の組織者となる。
13. С. Макашин, Салтыков-Щедрин на рубеже 1850-1860 годов, Биография, Худож. лит., М., 1972 (以下 С. Макашин と略称する), стр. 182.
14. 1884年10月2日付, И. С. Аксаковの手紙。《Письма русских писателей к А. С. Суворину》, Л., 1927, стр. 20.
15. С. Макашин, стр. 182.
16. Там же, стр. 182.
17. Там же, стр. 183.
18. Я. Эльсберг, Салтыков-Щедрин, Худож. лит., М., 1953, стр. 64.
19. シチェドリンはその後、最晩年の作品「僻地の旧習」でも、アクサーコフの「家族の記録」(1856年)や「孫バグロフの少年時代」(1858年)から受けた印象について述べている。しかし50年代にはこれらの作品を「ロシア民衆の内的生活を解説」したものとして評価するようになっている。
20. 「県物語」の中の「祈禱者、遍歴者、通行人」という標題がついている章を指す。1858年8月「ロシア報知」に初めて発表した時は、この章にアクサーコフへの献辞があったが、後「県物語」全体を1冊の単行本にして出版した時も、その後の出版にも、この献辞は取除かれている。
21. シチェドリノ全集第5巻参照。この考えはすでに社会評論の形で発表されているが、シチェドリノの生前発表されなかった「修道僧パルフェーニーの遍歴物語」に関する論文(1857年)の中で、この

- 考えを発展させて数ページにわたって述べている。これについては第6章でふれる。
22. 「退役兵士ピメノフ」(Щ. т. 2, стр. 124-), 「パホモヴナ」(Там же, стр. 133-), 「フレブチューギンとその家族」(Там же, стр. 139-).
 23. Щ. т. 18 (1), стр. 181-182.
 24. Там же, стр. 187-188.
 25. С. Макашин, стр. 149.
 26. 1841-1926. 社会・文学評論家, 詩人, 「Искра」「Санкт・Петербург通报」同人.
 27. 1806-1883. 社会評論家, 社会活動家, スラヴ主義者. 皇帝直属の協議機関である国民会議召集を提唱, 1861年農奴解放の準備に参加.
 28. 1801-1872. 作家, 辞書編さん者, 人種誌学者, 高級官吏.
 29. 1816-1867. 貴族, 社会評論家. 農民問題に関するパンフレット執筆者, 侍従.
 30. В. Буренин, Дневник корреспондента, II. В Москве, — «Новое время», СПб. 1877, 15 мая, № 434, стр. 2; С. Макашин, стр. 149-150.
 31. Н. Яковлев, Щедрин и Аксаков в пятидесятых годах. — В кн. «Труды Отдела новой русской литературы» (Пушкинский дом).
 32. С. Машинский, С. Т. Аксаков, Жизнь и творчество, Худож. лит., М., 1973, стр. 228, 238, 252.
 33. Там же, стр. 222-.
 34. М. Е. Салтыков-Щедрин в воспоминаниях современников, т. 2, стр. 254, Худож. лит., М., 1975.
 35. Щ. т. 3, стр. 257-294. 1862年「同時代人」№2に発表.
 36. Щ. т. 5, стр. 368-382. 1863年「同時代人」№9に発表.
 37. С. Машинский, С. Т. Аксаков, жизнь и творчество, Худож. лит., М., 1973, стр. 227, 235, 258.
 38. Н. А. Добролюбов, Соб. соч. в 9-ти томах, Худож. лит., М.-Л., 1961-1964, т. 2, «Губернские очерки» М. Е. Салтыкова-Щедрина, стр. 145. см. и стр. 144. 1857年「同時代人」№12に発表.
 39. Н. Г. Чернышевский, Полн. собр. соч. в 16-ти томах, (以下 Н. Г. Чернышевский と称する) Гослитиздат, М., 1939-1953, т. 7, стр. 983.
 40. 1808-1856. 作家, ロシア民謡収集家, スラヴ主義者.
 41. Щ. т. 5, стр. 41, 46 など.
 42. 1833-1904. 歴史家, 文学研究家.
 43. 1825-1884. 女流作家. シチェドリンは彼女の中編小説に関する論文で, 彼女の創作の矛盾をあげた(Щ. т. 5, стр. 371, 382).
 44. Лит. наслед. т. 67, стр. 454.
 45. Щ. т. 5, стр. 371.
 46. 1855年「同時代人」第10号に発表.
 47. 1820-1879. 歴史家. 1847年からモスクワ大学教授, 1856年「ロシア報知」第3巻第5号に発表.
 48. 1856年「ロシア論談」№3に発表. 1824-1887. 社会評論家, モスクワ宗教アカデミーの哲学教授, 1855-1863. モスクワ検閲委員会の検閲官.
 49. Ф. М. Достоевский, Письма, Под. ред. А. С. Долинина, М.-Л., 1928, т. 1, стр. 32 и т. 2, стр. 264, 476.
 50. ハルキドン半島の突出した山岳地帯にあって, もともとは4世紀から創られた僧侶の共和国. ロシアの僧侶階級に対して強い影響力を持っていた.
 51. Тургенев и круг «Современника». Неизданные материалы. 1847-1861, Academia, М.-Л., 1950, стр. 217, 330.
 52. И. С. Тургенев, Полн. собр. соч. и писем в 28-ти томах, изд. АН СССР, М.-Л., 1960-1968, Письма, т. 3, стр. 242.
 53. 1822-1864. 文芸批評家, 詩人.
 54. Письма к Дружину, стр. 101.
 55. Там же, стр. 104.
 56. Щ. т. 5, стр. 480.
 57. Там же, стр. 54-55.
 58. Там же, стр. 55.
 59. Там же, стр. 59.
 60. シチェドリンの「県物語」を指す.

61. П.И. Мельников-Печерский, 1819–1883, 作家.
62. Ап. Григорьев, «Парадоксы органической критики», Эпоха, 1864, № 5, стр. 272–273.
63. Щ. т. 5, стр. 34.
64. Н.Г. Чернышевский, т. 5, стр. 357–392.
65. Там же, т. 5, стр. 377–379; Е.И. Покусаев. После крушения революционной ситуации в кн. «Н.Г. Чернышевский. Статьи...» т. 3, Саратов, 1962, стр. 159–160; Р. Левита. Общественно-экономические взгляды М.Е. Салтыкова-Щедрина, Калуга, 1961, стр. 170–171.
66. Щ. т. 7, стр. 617. 1869年「祖国雜記」№ 8, 第2部に発表.
67. Н.Г. Чернышевский, т. 4, Заметки о журналах, Из № 5 «Современника», Славянофилы и вопрос о общине, стр. 760.
68. Щ. т. 16 (1), стр. 381. «Пёстрые письма», Письмо IX. 1886年「ヨーロッパ報知」№ 10に発表.

主 要 参 考 文 献

- Собрание сочинений и писем М.Е. Салтыкова-Щедрина в 20-ти томах, Худож. лит., М. 1965–1978.
- Полное собрание сочинений и писем Н. Щедрина (М.Е. Салтыкова) в 20-ти томах, Худож. лит., М. 1933–41.
- С. Макашин, Салтыков-Щедрин на рубеже 1850–1860 годов, Биография, Худож. лит., М. 1972.
- В.Я. Кирпотин, Философские и эстетические взгляды Салтыкова-Щедрина, Полит. лит., М. 1957.
- Я. Эльсберг, Салтыков-Щедрин, Худож. лит., М. 1953.
- М.Е. Салтыков-Щедрин в воспоминаниях современников в двух томах, Худож. лит., М. 1975.
- Литературные взгляды и творчество славянофилов, 1830–1850 годы, Наука, М., 1978.
- С. Машинский, С.Т. Аксаков, жизнь и творчество, Худож. лит., М. 1973.